

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 6 部門第 3 区分

【発行日】平成27年1月15日(2015.1.15)

【公開番号】特開2012-238302(P2012-238302A)

【公開日】平成24年12月6日(2012.12.6)

【年通号数】公開・登録公報2012-051

【出願番号】特願2012-92289(P2012-92289)

【国際特許分類】

G 0 6 F 1/16 (2006.01)

【F I】

G 0 6 F 1/00 3 1 2 E

【手続補正書】

【提出日】平成26年11月25日(2014.11.25)

【手続補正 1】

【補正対象書類名】特許請求の範囲

【補正対象項目名】請求項 2

【補正方法】変更

【補正の内容】

【請求項 2】

前記把持部材は、前記筐体に近接した収納位置と、前記筐体から離隔した引出位置との間を可逆的に変位し、

前記凹部は、前記収納位置において、前記把持部材内部に収容される、請求項 1 に記載の電子機器。

【手続補正 2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 0 8

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 0 0 8】

しかしながら図 8 及び図 9 に示すような構成では、支持部材 1 4 1 及び 1 4 2 をハンドル 1 0 4 に対して回動可能な構成としているため、ハンドル 1 0 4 の外郭における支持部材 1 4 1 及び 1 4 2 の取付位置近傍に、支持部材 1 4 1 及び 1 4 2 が出入りするハンドル 1 0 4 における端面に開口（以下「遊挿口」と称す）1 0 4 d 及び 1 0 4 e が生じてしまう。したがって、ハンドル 1 0 4 を図 8 及び図 9 に示す引出位置から矢印 X に示す方向に収納する際、またはハンドル 1 0 4 を手で把持した状態でノートパソコンを持ち運ぶ際に、ノートパソコンが揺動等すると、1 0 4 d または 1 0 4 e に異物を挟み込んでしまうことがあり、ハンドル 1 0 4 の収納動作をスムーズに行えなくなるという問題がある。

【手続補正 3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 3 5

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 0 3 5】

上記のような構成とすることにより、支持部材 4 3 及び 4 4 がハンドル部材 4 に対して回動動作する際に、ハンドル部材 4 と支持部材 4 3 及び 4 4 との間に異物が挟まることを軽減することができる。具体的には、支持部材 4 3 に凹部 4 3 a を備え、支持部材 4 4 に凹部 4 4 a を備えることにより、支持部材 4 3 及び 4 4 が回動動作する前と回動動作した後における角度 R 1 及び R 2 の変化が小さいため、ハンドル部材 4 と支持部材 4 3 及び 4

4との間に異物が挟まりにくい。R 1及びR 2の変化を小さくさせるためには、凹部4 3 aおよび4 4 aを円弧状に形成することが望ましい。ハンドル部材4を引き出した状態で、支持部材4 3及び4 4とハンドル部材4とが交差する交差部に円弧の頂点を形成するまたはハンドル部材4に頂点を収納することで、ハンドル部材4を引き出しても、R 1及びR 2の角度の変化はなだらかに変化し、角度を減少させることもできる。例えば、図7 Bに示す状態と図7 Cに示す状態とでは、ハンドル部材4に対する支持部材4 3及び4 4の角度は大きく異なるが、ハンドル部材4と凹部4 3 a及び4 4 aとの角度R 1及びR 2は大差がなく、ハンドル部材4と支持部材4 3及び4 4との間に異物が挟まりにくい。また、例えば、ハンドル部材4が、図7 Cに示す位置から矢印JまたはMに示す方向へ大きく変位したとしても、角度R 1またはR 2が極端に小さくなる（例えば鋭角）になることはなく、ハンドル部材4と支持部材4 3及び4 4との間に異物が挟まりにくい。

【手続補正4】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 3 9

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 0 3 9】

なお、本実施の形態では、ハンドル部材4に長円状凹部1 4 c、1 4 d、1 5 c、1 5 dを形成したが、第1の筐体1における支持部材4 1及び4 2の支持箇所に長円状凹部を形成する構成としても、本実施の形態と同様に動作する。